

JICA ボランティア事業について

笹館 孝一

(独立行政法人国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊事務局次長)

皆様、こんにちは。ただいまご紹介に預かりました青年海外協力隊事務局次長の笹館です。本日皆様はこの場にお集まりになり、今日から2日間の研修、そしていよいよ65日間の訓練へと入っていきます。

さて、協力隊への参加を考える方々が、その応募を躊躇してしまう三大要因というのがあります。1つ目は帰ってきたら就職どうなるのだろうかという進路の問題。これは現職参加の皆様は既にクリアされているところなのでいいのですけれども、一般の人にとってはこれが非常に大きな問題になっています。

2つ目は語学です。現職教員参加のうち多くの方々が理数科教育隊員としての派遣です。他にも小学校、養護などでの参加もありますが、理科系の方々というのは一般的に語学については苦手意識をもっている方が多くいらっしゃいまして、躊躇する理由の大きな原因となっています。そこは是非とも申し上げたいところなのですが、皆様が直接これから体験する65日間の訓練、これは6、7割がたが語学の習得にあてられます。そしてその後は2年間現地で生きた語学を実地で学ぶことができます。したがってこれを不安というよりも、チャンスと捉えれば、自分にとって非常に大きな力になると考えればいただきたいということです。

3つ目、これは現地の治安や健康面での不安です。郷に入ったら郷に従えという言葉がありますが、社会文化的な背景あるいはその国の成り立ちも含めて現地任国の事情をよく知ることが大切です。日本とは異なります。これからの研修期間を通じてある程度そうした準備をしていていただきますが、机上で調べものをしていても分からないことが現地では起こりますので、実質的には現地に行ってから集中力を切らさないことが安全対策には重要となってきます。そういった意味も含め、訓練を控えて今日皆様は満を持して参加されていると思いますので、これからの2ヶ月一生懸命勉強に励み、準備していただければと思います。

そして今日皆様にこの場をお借りしましてお伝えしたいこと、それは皆様に対する期待です。協力隊事業の目的は3つあります。1つ目が、途上国と呼ばれる国々の開発に資するために皆様の技術や経験を生かしていただくということ。2つ目は国際交流、つまり人と人との付き合い、人と文化の相互理解に資することです。3つ目が海外での経験、特に途上国での経験を日本社会へフィードバックしていただくことです。先ほども申し上げました訓練期間中、そして現地での活動を通じて、皆様方自身がパワーアップしていただくことが、ひいては今申し上げた3つの目的全てに還元されてくるものですので、よろしくお願ひしたいと思います。

1つ目の現地に技術を落とすことに関してですが、先ほども文部科学省の方からお話がありましたとおり、協力隊の平均年齢は28歳なのですが、皆様方がその平均年齢を押し上げています。おそらく今年度も70名くらいが現職教員特別参加制度で参加されますし、他にも教員の方々が私立の学校からあるいは学卒直行の方々などが参加されますが、皆様方の平均年齢は30を越えています。そしてそれだけのことはあり、社会経験あるいは学校

現場での実務経験が豊富な集団となっています。ここで是非お願いしたいことなのですが、皆様、行かれますとまずご自身のことで精一杯なのが普通ですが、だんだんと余裕が出てきます。そうしましたら、学校現場やフィールドで悪戦苦闘している経験の浅い若い協力隊員を是非サポートしてあげてください。現地では職種ごとに複数の隊員が分科会を形成してお互い情報共有しながら、あるいは作った教材などを共有しながら、現地の開発のために協同する取り組みがそここで行われています。仮にそういった動きがないとしても、皆様が中心になって作っていただければと思います。また、現地での隊員活動を専門的見地から日本からバックアップしていただくシステムとして文部科学省が取り組んでいる国際教育協力イニシアティブもあります。さらに現地には JICA の専門家の方々、あるいは相手国政府関係者や他の援助機関にも専門家がおられますので、そういう方々とうまくコンタクトをとっていただき、いろいろなことを学んでいただきつつ、ご自身や他の隊員が活動期間中に専門的な見地からも能力向上が図れるような機会を意識してつくっていただければと思います。

それから 2 つ目は国際交流についてです。私自身も経験がありますが、現地にしばらくいますと日本を紹介するイベントを開催したいと思う気持ちが沸き起こってきます。これも活動に余裕が出てくる 1 年を経たころでしょうか、日本の学校でそうしたイベント関係を切り盛りされる機会が多かった先生方が、赴任後もイニシアティブをとって、このような企画を実施するケースは多いです。私はアフリカのニジェールという国に 4 年間赴任していましたが、その時も現職参加の教育分野系の隊員や青少年活動の隊員が中心になってそれぞれの隊員の任地でキャラバンの開催していました。ニジェールでは持ち回りが可能な開催に必要なグッズが揃ってしまっていて、いつでもどこでもやる気があれば一定のレベルの紹介展ができる体制になっていました。皆様の派遣される国がどの程度のレベルまで整っているかは分かりませんが、こうした活動も普段の教室での協力活動と合わせて是非視野に入れていただけたらと思います。

そして最後に 3 つ目の途上国での経験の日本社会へのフィードバックに関してですが、これは、帰国後に学校という還元しやすいフィールドをもつ皆様だけではなく、多くの協力隊を経験した方々に体験していただきたい活動で、日本社会もそれを期待しています。しかしながら、現地に赴任中に私が感じたことは、活動中の隊員は活動に一生懸命になって、しばらくは日本のことを忘れてしまう傾向にあることです。皆様のようにいつも日本の派遣元のことも考えなくてはいけない立場とは意識が違うわけです。そこで、皆様の方から回りの隊員をときどき日本の現実に引き戻していただくということと、どのように準備すれば帰国後うまく体験を子どもたちあるいは市民の方々に伝えることができるのかというノウハウのところもぜひ教えてあげていただければと思います。日本でいきなり「アフリカ！」といっても引かれてしまうこともあるので、国際理解教育や開発教育のなかで紹介されている導入や伝え方のノウハウについて皆様方から発信していただければと思います。また、派遣中後半で結構なのですが、模擬授業というかたちで一人あたり 15 分でも

20分でもいいのですが、皆様プロの還元方法を隊員総会など多くの隊員が集まる機会を利用して披露していただくことを是非ご検討いただければと思います。またニジュールでの例ですが、現職教員特別参加制度で派遣された方々に一人15分程度で模擬授業を発表する機会を設けたことがあります。ある先生はニジュールの誰々ちゃんの日ということで、事細かに情報収集をして、何時には何をしてどうなってどういう関係でこういうことをやらなくてはいけないのかと綿密な下調査に基づき発表された方。別の先生はペーパーも何も用意せずに語るだけで聴衆をうならせる方法で授業をやっていました。これはとても感動的で私たちも涙が出てしまうほどで、先生はやはりこうしたプレゼン能力を一般隊員とは違ってレベルで持っているんだなということを感じました。つきましては、実際にやろうと思ったときに材料が足りないということだけは避けるために、現地にいる間に情報収集が必要であるという視点を一般の隊員の方々とも共有していただくような特段の配慮をお願いしたいと思います。

以上、協力隊の目的の3点につきまして皆様への期待ということでお話させていただきましたが、今回、平成20年度の春募集では「世界も、自分も、変えるシゴト」というキャッチコピーを掲げまして、協力隊員の募集をさせていただいています。協力隊活動イコール厳しい状況下に置かれた途上国に何らかの支援をという認識に加え、まさに自分も変える価値ある経験、キャリア形成につながる経験であるという一面があることも、全面に押し出させていただいて結構だと思います。参加者の能力が向上することがひいては先ほど申し上げた隊員派遣の目的につながりますので、ウィンウィンの関係を意識してこの2年間をご活用いただければと思います。

それではこれで私からのご挨拶に代えさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

以上